

ネパール・カトマンズ盆地における新規換金作物の選択要因 —インドラヤニのトマト栽培を事例として—

共生農業資源経済学講座 開発経済学分野

中野真衣

1. はじめに

自給自足をベースとしたネパールの農業において、伝統的な稲—小麦生産に代わり、貴重な収入機会となる換金作物の生産が広がった。丘陵部に属するカトマンズ盆地でも、乾季では小麦から、換金作物である馬鈴薯の作付けが増加した。さらにここ数年、より高収益な新規換金作物として、トマトが年間を通して栽培され始めている。そこで、本論文では、カトマンズ盆地における新規換金作物の導入過程を明らかにすることを目的とする。トマト栽培の導入から数年経たインドラヤニ地区で、2011年11月1日から17日間、現地のカウンターパートと共に聞き取り調査を行なった。

2. 雨除け栽培の普及と圃場条件

農家がトマト栽培を導入した理由に、まず高収益性が挙げられる。特に雨季のトマトの価格は高く、インドラヤニは同時期に生産量を増加させている。ネパールの丘陵部は降雨による病気の蔓延等で高収量は難しかったが、ビニールと竹を用いた雨除け栽培で克服している。初期に導入した農家を除き、ほぼ全員がインドラヤニ内の友達や親戚からトマトの栽培方法を習得している。

そして、今回の調査により、圃場ごとに導入時期が異なることが示された。馬鈴薯栽培が行なわれていた圃場より、小麦栽培の圃場で導入が早かったのである。以前に馬鈴薯が普及した時は、灌漑による水量の確保ができた圃場から導入され、一般的にも新規作物や生産量増加には灌漑設備が重要といわれている。しかし、トマト栽培は水資源の少ない圃場から真っ先に導入されたのである。

また、馬鈴薯栽培も近年の経済成長等により、特に雇用労賃が10年前と比較し大幅に上昇したため、収益が圧迫されやすくなった。一方、トマト栽培に転換することで所得は10倍近くとなり、トマト栽培の普及要因となった。

3. 連作障害と農薬の問題

しかし、トマト栽培には以下の問題が指摘される。第一に、連作障害である。トマトは稲の栽培時期と重なるため、年間で田と畑の地目交替が行なえない。しかも、農家は骨組みの竹を移動させることが難しく、5年目にトマトの作付け場所を変える。全所有地をトマト栽培に変えた農家も存在し、この場合、土地の不毛化が危惧される。第二に、農薬の多量使用による健康被害の懸念である。トマトは雨季に栽培され、病気の蔓延リスクを回避することからも、農薬の使用頻度は高い。トマトに限らず、ネパール全土でも、適正量以上の農薬使用が大きな社会問題となっている。

4. おわりに

本論文では、新規換金作物の導入過程を、インドラヤニのトマト栽培を事例として明らかにすることを目的とした。現地調査により以下のことが示された。まず、農家は雨除け栽培を行なうことで、高値となる時期に生産量を増加させている。次に、トマト栽培は水資源の少ない圃場から導入され始めた。現在では、馬鈴薯栽培の圃場でも、収益性の点からトマトへの転換が増加している。また、作付けを全てトマトに変えた農家も存在し、生産性のリスクよりトマトの高収益性を求めているといえる。一方、より生産性や安全性を高めるためには、農家同士の連携だけでは不足の部分もある。連作障害や健康被害に対し、農家がどのように行動するか、今後も観察を必要とする。